



竹内宏二(たけうち ひろし)
(株)竹内商店代表取締役社長。札幌狸小路商店街振興組合理事長。札幌中心部の商店街による活性化協議会を通じて自発的なまちづくりに取り組む。

多様なニーズに応えられる店づくりが街の風景を変えていく。

小林 そうしたものを、市民と行政とがパートナーシップをもってこれからの協働でつくっていくかなければならないのだと思います。協働というのは何か一つのことについて労働を半分ずつ分担してやるということばかりではなく、例えばハードやインフラストラクチャーをつくるのが得意な行政と、楽しくそれを使うのが得意な市民とが一緒になって何かをやることだとも思います。

竹内 最近TMOが札幌にできました。まちづくりのいわばコーディネーター制度です。これから大通、駅前、すすきの地区にそれぞれ活性化協議会というような機関をつくって

協働でつくるまちの顔

そことTMOが街を育てていこうとしています。

森下 行政と市民が話したり、事を進めていったりする上で、間に誰かコーディネーターがいるのは重要なことでしょう。これからのパートナーシップの在り方で言うと、何かやるうとしていてる人に対していきなり支援するのではなく、いろいろな枠組みを用意しておいて、お互いがうまく生かし合える、市民の力が生きたような協働の仕方を生み出していくとよいと思います。

小林 そうですね。それと、これからはまず、商店街やレストランの店舗展開などにもまちづくりがかわってくるようになると思います。例えば街のすてきな景色を見ながら



小林英嗣(こばやし ひでつぐ)
北海道大学大学院 都市空間計画学研究室 教授。札幌市都市景観審議会会長。札幌市・都心まちづくり計画策定協議会座長。北海道都市計画審議会会長などを務める。

都市としての基盤はできた。これから街をどう使うのか。

な基盤づくりをおおむね終え、これから街をどう使うのか、市民の生活や魅力的な活動が行いやすい街へどう変えてゆくのかが、ということを考える段階にきているのだと思います。

森下 札幌には安心して暮らせて仕事ができるという基本的な機能がそろっているわけですから、これからは文化や芸術を含めた質の向上が問われてくるのではないかと思います。

そこから新しい文化を生み出してほしいのですが、残念ながら「札幌発」というものが全国的にあまり聞かえてはきませんね。

小林 ヨーロッパの都市よりも、札幌の歴史は比較的オーストラリアやアメリカの都市に似ているといえます。そうした街の人々と、札幌の市民が違うのは、彼らは街の使い方が

例えは札幌と同じように歴史がそれほどないニューヨークは、世界を代表する文化都市です。それはこれまでたくさんの人種、異文化を都市として受け入れ、サブカルチャーというものを非常に大切にしてきた街だからです。札幌も新しい街ですから、いろいろなものを受け入れ、

ものすごくつまみ、ということですが、五十〜六十万人の都市の大通公園のようなところでも、オペラをやったとか、とにかくみんな街を使うべきを知っているし、そうした使い方が許されているんですね。

森下 イベントプロデューサーの立場から言うと、今の日本では街の中で

のイベントが非常にしづらいいのです。さまざまな規制が厳し過ぎて。そうした中でYOSAKOIソーラン祭りなんかは札幌発の立派なサブカルチャーの一つだと思いますよ。

竹内 札幌は歴史の浅いこともあって、豊かな経験や知恵を生かしたスポンサーやアドバイザーとなれる「旦那」というものがいないんですね。歴史のある街では昔から旦那が祭りや行事の面倒を見てきたのですが、

それと今の札幌都心について言うと、森下さんの言われるようにちょっと街を使おうとすると大変な規制があります。われわれの責任と義務はきちんとルール化して負うべきなのは当然ですが、もつと市民が使えようにしていくべきだと思います。

札幌は新しい街。いろいろなものを受け入れ、新しい文化を生み出してほしい。



森下慶子(もりした ゆき)
(株)ケービー代表取締役。日本都市計画家協会理事。イベントプロデューサーとして、「国際花と緑の博覧会」「黒部市アクアパークモデル事業計画」などの各種イベント、都市づくり、まちづくりなどの企画、制作、運営にかかわる。

*1サブカルチャー 社会の主流の文化ではなく、ある特定の集団だけが持つ文化的価値や行動様式。
*2インフラストラクチャー 道路・鉄道・港湾・ダムなど産業の基盤となる社会資本のこと。

食事ができるとか、そういう付加価値がレストランなどにも求められてきています。そういう意味で行政が連携していくというのもパートナーシップだと思つたんです。

森下 イタリアの街では、中心市街地にレストランを出すとき、しっかりと木といったその地域にある建築資材を使ったら補助事業にしてくれる例があります。また、行政が求めるものと合致すれば、例えば個人のチョコレート屋さんでも支援し、街の風景をつくっていくというふうな例もありますね。

竹内 商店街でも個性を生かした自由で面白い店づくりに各店がもっと取り組んでいくべきだと思つていんです。多様なニーズに応えられる店づくりが街の風景も変えていく。

小林 都心の商店街は、十代の若者やシルバー世代といわれる人たちのニーズ、そして世界から訪れる人々が世界都市の質として求めるものに思えらるようなセンサー(感知器)を持つことが必要ですね。

竹内 そういう面でタウンマネージャーを必要としているのが現状です。し、本当に真剣にそうした意見を聞いていきたいと思つたんです。

森下 世代の異なる人たちが異業種の人たちの声をすくい上げるのは意外と難しいのですが、とにかく直接

